

## ヒュームのコピー原理と表象理論

飯塚 舜

観念は対象をどのように表象し、表象内容は何によって決定されるのかという問題に、ヒュームはどのような表象理論によって答えるのか。この点について研究者たちの解釈は一致をみていない。本稿では、ヒュームは表象をコピー関係とみなしているとする解釈、機能的役割の遂行であるとする解釈、表象にはそれら両方が必要であるとする解釈の3つを検討した上で、最後の解釈に修正を加えたものを最終的な結論として提示する。

第1節及び第2節では、ヒュームの表象理論の標準的な解釈であるコピー解釈と機能的役割解釈をそれぞれ紹介し、難点を指摘する。第3節では、コピー関係と機能的役割の遂行をとともに契機として含む統一理論をヒュームに帰する統一解釈を提示し、統一解釈はコピー解釈と機能的役割解釈それぞれの問題点の一部を解消できること、そして依然残された問題があることを示す。第4節では統一解釈に修正を加え、その眼目を示す。

### 1. コピー解釈

#### 1. 1 コピー原理

観念はどのようにして何かを表象するのかという問いに対する答えの一つは、対象をコピーすることによってである、というものである。本項では、この解釈の根拠となる、ヒュームが自らの用語法を説明する際に導入する「コピー原理 (copy principle)」（Garrett 2015, 43）を紹介する。

ヒュームによれば、精神に現れるすべての知覚 (perceptions) は印象 (impressions) と観念 (ideas) に分かれる。印象とは勢いと激しさを伴って精神に現れる知覚であり、観念とは思考や推論における生気を欠いた印象の像である (T 1.1.1.1)。印象と観念はさらに、単純なものと複雑なものに区分か

れる。単純印象・単純観念は区別や分離を受け入れない知覚であり、対する複雑印象・複雑観念は部分へと区別され得る知覚である (T 1.1.1.2)。

コピー原理とは、単純印象と単純観念の間に成り立つ関係を述べた命題である。

コピー原理：すべての観念は印象からコピーされる (T 1.1.3.4)

観念が印象のコピーであるとはどのようなことか。ヒュームは次のように言う。

すべての単純印象に対応する観念が伴い、すべての単純印象に対応する印象が伴うという既に主張したことを、新たに見直して私はまず確信する。類似した知覚のこの恒常的连接 (constant conjunction) から、対応した印象と観念の間には強い結び付きがあるということを、そして一方の存在は他方の存在に相当の影響を有することを、私は直ちに結論する。[...]印象と観念が初めに現れる順序を考えると、恒常的な経験から、単純観念は常に対応した観念に先行し (take the precedence), 反対の順番ではありえないということがわかる。(T 1.1.1.8)

ここからは、 $x$  が  $y$  のコピーであるために満たさなければならない2つの条件が読み取れる。一つは  $x$  と  $y$  の間の類似関係であり、もう一つは因果関係である。後者については説明を要するだろう。ヒュームにおいて (哲学的関係としての) 因果とは、「隣接 (contiguity), 継起 (succession), 恒常的连接」(T 1.3.6.16) の組み合わせにほかならない。隣接とは2つの対象が時間的・空間的に隔たっていないことであり (T 1.3.2.6), 継起は一方が他方に先行することを意味する。ある種に属する対象が別の種に属する対象に常に伴い、それらの中に常に隣接と継起の関係が成り立つことを恒常的连接と呼ぶ。上記の引用は、単純印象は単純観念に先行し、それらの知覚は恒常的に接続すると述べている。またコピー関係にある印象と観念が時空間的に隔たっていると考える必要はないだろう。従って、 $x$  が  $y$  のコピーであるために

は、①  $x$  は  $y$  によって引き起こされた (caused)、②  $x$  は  $y$  に正確に類似している、という因果と類似の2つの条件を満たす必要がある。

## 1.2 コピー原理のジレンマ

しかし、コピー原理にはあるジレンマが指摘されるとともに、表象をコピー関係とみなす解釈の根拠とするには2つの不十分な点がある。

まず、コピー原理はヒュームの展開する議論において中核的な役割を果たしているが、その内容と役割の遂行可能性を巡って、次のようなジレンマが指摘される (cf. Flew 1961, 25–26, Garrett 1997, 43–44)。コピー原理は経験的な一般化であるか、またはアプリアリな主張である。しかし、いずれであってもそれぞれ問題が生じる。以下にジレンマの2つの角の詳細を見ていく。

1 つ目はコピー原理が経験的な一般化であるとする問題である。ヒュームは必然的結合 (necessary connexion) や精神の外にある物体、人格の同一性を論じるにあたり、それらの観念がコピーする印象を探するという方法を取る。ヒュームがこれらの実在性について懐疑的な見解を提出していることは広く知られているが、その根拠はコピーの原本となる印象が存在しないということにある。

この印象への遡行という論証が理解可能なものであるためには、「すべての(単純)観念は(単純)印象のコピーである」というコピー原理の言明は経験的な一般化であってはならない。なぜなら、もしコピー原理が単なる経験的な一般化であるとすれば、観念がコピーする印象が存在しないという事態は原理の例外に過ぎず、原理の侵犯ではないためである。原理の例外が見つかったとき、原理が修正されるべきであるということはあるが、必然的結合や外的物体の観念が否定されるべきではない。

しかし他方で、コピー原理をアプリアリな言明とみなすこともヒュームの主張と不整合をきたす。前節で見たとおり、コピー関係は因果関係を条件としている。しかしヒュームはしばしば、因果関係に関するアプリアリな知識はあり得ないと述べている (cf. T 1.3.6.1)。

因果言明がアプリアリでないことは、「私たちが明晰判明な観念を形成できるもので、不合理で不可能なものはない」(T 1.1.7.6)、「私たちが思念できる

ものは、何であれ可能である」(A 11) という「思念可能性原理 (conceivability principle)」(Garrett 2015, 48) から示される。例えば私たちは普通、マッチを擦ることが着火を引き起こすと考える。しかし、着火の代わりにマッチが濡れており着火しないと想像することは可能である。マッチを擦るとマッチが濡れており着火しないとすることを私たちは思念することができ、思念可能性原理に従えば、マッチの擦過と着火の間に因果関係が成り立たないことは可能である。このように、原因・結果とされる知覚は自由に切り離して他の知覚と入れ替えることができるため、因果言明はアプリオリ、つまり真でないことが不可能であるような言明ではない (T 1.3.6.1)。

思念可能性原理が正しく適用されるなら、因果言明がアプリオリでないというのは、単に「原因・結果とされる個別の印象・観念の組み合わせがアプリオリではない」ということではない。もし印象が原因であり観念が結果なのではないと思念することが可能であるなら、印象一般と観念一般の間の因果関係も例に漏れずアプリオリではないことが帰結する。

ところで、ヒュームは観念に対する印象の先行を経験的な事実の指摘によって示している (T 1.1.1.8)。ヒュームが経験に訴えるのは、印象が観念に先行しないことも想像可能であると前提しているためと考えられる。もし印象が観念に先行しないことは想像不可能であり、従って印象の先行はアプリオリだと考えているのであれば、そのことを示すために経験を参照する必要はないためである。印象が先行しないことが思念できる以上、思念可能性原理は印象一般と観念一般にも適用されるのであり、印象は観念という結果の原因であるという言明そのものもアプリオリではない。従ってコピー原理は、印象は観念の原因であるというアプリオリな主張としての因果言明を含むものではあり得ない。

以上のようにコピー原理は、経験的一般化であるとするると印象への逆行論証が理解不能になり、アプリオリであるとするると因果言明はアプリオリでないというヒュームの主張と不整合をきたすというジレンマを抱えている。

次に観念の表象を説明する上でのコピー原理の不足点を見ていこう。まず、ランディによると、必然的結合を例に取れば、印象への逆行論証の結論は、単に「私たちは必然的結合のコピーであるような観念を持たない」というこ

とではなく、「私たちは必然的結合の観念を持たない」というものである (Landy 2012). 言い換えれば, 印象への逆行論証からは「私たちは必然的結合を表象する観念を持たない」という結論が得られるのでなければならない.

しかし, コピー原理は観念が何を表象するかということについて何ら主張を含んでいない. ランディによれば, コピー原理の類似性条件は, 観念の図像的内容 (pictorial content) が印象の図像的内容と正確に類似するということであり, コピー原理の主張は, 正確には「すべての単純観念は単純印象によって引き起こされ, 単純印象の図像的内容と正確に類似した図像的内容を持つ」というものである<sup>1</sup>. 従って, 必然的結合を含む図像的内容を持つ単純印象が存在しないということと, コピー原理の主張を前提として展開できるのは次のような推論である.

P1: 私たちはその図像的内容が必然的結合を含むような単純印象を持たない

P2: すべての単純観念は単純印象のコピーである (=すべての単純観念は単純印象によって引き起こされ, 単純印象の図像的内容と正確に類似した図像的内容を持つ) (コピー原理)

C1: 私たちは必然的結合 (=その図像的内容が必然的結合を含むような単純印象) のコピーである単純観念を持たない (P1 + P2)

コピー原理の主張を前提として導出できるのは、「私たちは必然的結合のコピーであるような単純観念を持たない」(C1) ということに過ぎない<sup>2</sup>. これは, 印象への逆行によってヒュームが主張しようとする「私たちは必然的結合の観念を持たない」(C2) という結論を導出するには不十分である.

また, コピー原理は単純知覚のみに関する主張であり, 複雑観念についての主張が含まれていない. ヒュームは「歩道は黄金で壁はルビーでできた新しきエルサレム」を想像できることや, パリを見たことがあっても街路や家並みを正確な比率に保った観念を形成できないことを例として, コピー原理の適用範囲を単純観念から複雑観念へと拡張することに制限を加えている (T 1.1.1.4). 新しきエルサレムの観念や不正確なパリの観念は複雑観念であ

り、コピー原理を適用できない。また例えば「すべての観念は印象のコピーである」とコピー原理を単純に拡張したとしても、これらの観念は正確に類似した複雑印象を持たないため類似性条件を満たさず、コピーであるとは言えない。これらの観念は対象を誤表象しているとは言えるかもしれないが、何も表象していないとみなすべきではないだろう。しかし、コピー原理の主張は単純印象と単純観念のみに関するものであり、複雑印象や複雑観念については何も言っていない。従って、表象現象をコピー関係とみなす解釈は、複雑観念による表象を単純観念による表象と統一的に説明するため、コピー原理を改定する、ないしは補足する必要がある。

コピー原理の内容と機能には上述のジレンマがあり、またコピー原理は、印象への遡行論証の前提としても、表象現象を説明する道具立てとしても不十分である。次項では、コピー関係を表象理論の中核としつつ、これらの問題に対応できる解釈として意味論的コピー原理を導入するランディの議論を紹介する。

### 1. 3 意味論的コピー原理 (semantic copy principle) とコピー解釈

ランディ (Landy 2012) は、コピー原理に加えて意味論的コピー原理を導入することでジレンマを解消し不足を補うことを試みる。コピー原理は観念の図像的内容に関する主張しか持たず、観念の表象内容については何も主張しない。ランディはコピー原理に加えて、ある観念が何の (be of) 観念なのか、ある観念が何を表象しているのかという観念の表象内容 (representational content) の問題に関わる、次のようなバージョンを考える。

意味論的コピー原理：知覚はそれがコピーする対象を表象する (=知覚の表象内容は、その知覚がコピーする対象の図像的内容である)

ランディはこの意味論的コピー原理が論証において十分な役割を果たし、なおかつアプリオリな言明ではないことを示すことで、ジレンマと不足に対処する。

ここでは、再び必然的結合の議論を例として意味論的コピー原理の機能を

検討する。コピー原理から導出できるのは先述の  $C1$  であり、 $C2$  というヒュームの目指す結論を導出することはできない<sup>3</sup>。  $C1$  から  $C2$  への推論は意味論的コピー原理の導入によって初めて可能になる。意味論的コピー原理によれば、単純観念が表象するのはその観念がコピーする原本である。従って、必然的結合を表象する単純観念があるとすれば、それは必然的結合のコピーであるはずである。このことから、単純観念に関しては  $C1$  から  $C2$  を導くことができる。

しかし、意味論的コピー原理がコピー原理同様に単純知覚のみに適用できるのだとすれば、複雑観念には適用できない。先述の通り、表象をコピー関係とみなす解釈の根拠とするには、複雑観念に適用できる必要がある。また、必然的結合の観念が複雑観念であるとすれば、先の推論から必然的結合の観念が存在しないことを論証することはできなくなる。

以上の要請に従って、意味論的コピー原理は以下の2つの部分からなる原理として、より正確に理解できる。

意味論的コピー原理  $s$  : 単純観念はそれがコピーする対象を表象する

意味論的コピー原理  $c$  : 複雑観念は、それを構成する単純観念がコピーする単純印象からなる対象を表象する

意味論的コピー原理  $c$  は複雑観念による表象を説明することができ、また単純観念と複雑観念のそれぞれについて次の推論が成り立つ。

$P3s$  : 単純観念はそれがコピーする対象を表象する (=単純観念の表象内容は、その単純観念がコピーする対象の図像的内容である) (意味論的コピー原理  $s$ )

$C2s$  : 私たちは必然的結合の (=その表象内容が必然的結合を含むような) 単純観念を持たない ( $P3 + C1$ )

$P3c$  : 複雑観念は、それを構成する単純観念がコピーする単純印象からな

る対象を表象する（＝複雑観念の表象内容は、それを構成する単純観念がコピーする対象の図像的内容である）（意味論的コピー原理  $c$ ）

$C2c$ ：私たちは必然的結合の（＝その表象内容が必然的結合を含むような）複雑観念を持たない（ $P3 + C1$ ）

このように、意味論的コピー原理  $c$  を導入することで、複雑観念についても印象への遡行論証が可能になる。

また、ランディはコピー原理を経験的一般化とみなし、意味論的コピー原理は因果関係に関するアプリオリな言明を含まない主張とすることでジレンマを回避する。通常のコピー原理についてランディの立場は必ずしも明確ではないが、おそらく、コピー原理は「多くの有利な証拠のある」経験的一般化であるというギャレットの見解を受け入れている。ギャレットによれば、コピー原理はアプリオリな主張ではないが、必然的結合のような問題のある観念についてそのコピーの原本である印象を探ることが探究に資すると合理的に期待できる程度に裏付けのある主張であれば、経験的一般化であっても問題ない（Garrett 1997, p. 49）。ランディはこの議論を受け入れ、コピー原理がある種の経験的に一般化された主張であるとみなすことで、ジレンマに陥ることなくコピー原理を印象への遡行論証に用いることができる。

ジレンマを回避するため次にランディが示すのは、意味論的コピー原理は因果関係に関するアプリオリな言明を含まないということである。意味論的コピー原理が主張するのは、知覚はそれがコピーするものの知覚であるということである。このことから、「もし知覚が何かの知覚であるなら、知覚はその何かによって引き起こされた」ということが帰結する。しかし、意味論的コピー原理は「知覚は何かによって引き起こされた」という主張を含意しない。意味論的コピー原理が含意するアプリオリな主張は、知覚の表象的内容は知覚がコピーする原本によって決定されるという、「表象」のある種の定義であり、アプリオリな因果言明を含んではいない。

以上に示した、意味論的コピー原理によってヒュームにおける観念による表象を説明するランディの解釈を、コピー解釈と呼ぶこととする。コピー解釈の優れた点は、観念の有意味性、すなわち観念が真または偽である信念た

り得ることを、ヒュームの記述に合致する仕方の説明することができるところにある<sup>4</sup>。ヒュームは真理 (truth) について、「真理には2種類ある。一つはそれ自体として考えられた観念の比率の発見にあり、もう一つは対象の観念と実在の一致にある」(T 2.3.10.2)、「真理あるいは虚偽 (falsehood) は、観念の実際の関係との一致または不一致、あるいは実在や事実との一致または不一致にある」(T 3.1.1.9) と述べる。これらに従うと、ヒュームは真理を「一致 (agreement)」として特徴づけているように見える<sup>5</sup>。さらに、「情念が真理や理性に対立、矛盾することはあり得ない。なぜなら、この矛盾は、コピーとして考えられた観念とそれが表象する対象との不一致にあるためである」(T 2.3.3.5) との記述からは、信念の真偽を決定する一致・不一致を、観念の一種である信念と表象対象の間のコピー関係とみなしていることが窺える。観念による表象をコピーとして理解するコピー解釈は、観念と表象対象の間に一致・不一致が存在し得ることを捉えており、観念の有意味性を説明することができる。このことは、必然的結合の印象への遡行の議論も含め、ヒュームによる理性主義者への論駁の前提となっている (Schafer 2015)。

#### 1. 4 コピー解釈の問題点

コピー解釈に対する主な批判は、ヒュームが言及する表象の様々な事例を十分に説明できないというものである。例えばギャレット (Garrett 2006) は次の例を挙げる。ヒュームは言葉 (words) が対象や事実 (T 1.3.9.12)、印象や感情 (T 2.1.2.1) を表象すると述べている。また、子供による両親の家系の表象 (T 2.1.9.13) や貨幣による美しい対象や快い対象の表象 (T 2.2.5.6)、穀物庫の鍵の引き渡しによる穀物の所有権の移行の表象や、石と土の譲渡による領地の所有権の移行の表象 (T 3.2.4.2) など、非心的な表象に広く言及している。しかし、表象現象のこれらのケースを、コピー解釈の表象理論はうまく説明できないように思われる。

心的な領域を自然の一部とみなすヒュームの姿勢に照らして、非心的表象が心的表象と統一的に説明されなければならないとすれば、コピー解釈を取る限り、これらの事例においても、表象するものと表象対象の間にコピー関係が成り立っていないなければならない。しかし、言葉は多くの場合表象対象と

類似しておらず、鍵や石の譲渡と所有権の移行の間に因果関係は認められない。貨幣のケースでは類似関係も因果関係も成り立っていない。子供による家系の表象の場合には、典型的には2つの関係がともに認められるかもしれないが、家系の表象によって祖先の持つ富と名声に誇りの情念を抱くというヒュームの主張に鑑みれば、表象はコピー関係の成否に関わらず成り立たなければならないだろう。このように、コピー解釈がヒュームに帰する表象理論は、非心的な表象現象の説明に困難を抱えている。

同様の問題は、抽象観念という心的表象の領域においても生じる。ヒュームはロックが認める普遍者としての抽象観念を認めず、抽象観念は特定の量と質を持つ個別的観念の一つであるとするパークリーの主張を擁護する (T 1.1.7.5)。ヒュームは個別的観念が普遍的であるかのように使用され得ることを、類似 (*resemblance*) と名辞の働きに訴えて次のように説明する。私たちは対象の間に見出される類似関係に従ってそれらの対象を集め、同一の名辞を与える。ひとたびこの習慣 (*custom*) を獲得すると、ある名辞を聞くとその名辞に包摂される一つの個別的観念が習慣とともに呼び起こされ、この習慣が、推論における必要に応じて、同じ名辞に包摂される他の個別的観念を呼び出す (T 1.1.7.7)。例えば「三角形」という名辞によって一つの個別的な正三角形の観念を抱いたとする。次に「三角形の3つの角は互いに等しい」という命題の真偽を考えようとする、二等辺三角形や不等辺三角形の観念が習慣によって呼び起こされ、命題が偽であることが確かめられる。

ヒュームはこのような抽象観念の働きを表象と呼ぶが (T 1.1.7.6)、抽象観念の表象はコピー関係によっては説明できない。名辞と個別的観念の間に類似関係はなく、個別的観念同士の間には因果関係が成り立たないためである。抽象観念理論はヒュームの基本的な道具立ての一つであり (cf. T 1.2.3.5, T 1.3.14.13)、これを説明できないことは、コピー解釈にとって、非心的表象以上に大きな問題である。

次節ではコピー解釈の抱えるこれらの問題点を解消する第二の解釈として機能的役割解釈を提示し、そのメリットと問題点を検討する。

## 2. 機能的役割解釈

## 2. 1 機能的役割

ギャレット (Garrett 2006) によれば、ヒュームは観念が果たす因果的な、あるいは推論上の機能的役割 (functional role) によって心的表象を説明している。この解釈を本稿では機能的役割解釈と呼ぶ。ギャレットによれば、何かを表象するものは表象対象が生み出すのと同様の心的効果を生み出し、表象対象の機能的役割を遂行する。ここにいう心的効果には、連合する観念、信念、感情、情念、欲求を抱かせることや、さらに別の観念などを抱く心的傾向性を生じさせることが含まれる。

ヒュームは観念と印象の精神に対する効果について、次のように述べている。

存在する、または存在するだろうと私たちが信じる対象の観念は、程度は劣るものの、感覚や知覚に直接現れるそれらの印象と同様の効果を生み出す。信念のこの効果は、単なる観念を印象と等しいものに引き上げ、情念に対する似た影響力を与える。[...]私たちが勢いと活気において観念を印象に近づけると、精神への影響の点で観念は印象を模倣する。(T 1.3.10.3)

このように、観念はときに印象と同様の心的効果を持つ。また、ヒュームは推論上の機能的役割についても、観念が印象の代わりになり得ることを示唆している。ヒュームにおいて因果推論の典型は「記憶や感覚に現れる印象から原因あるいは結果と呼ばれる対象の観念への移行」(T 1.3.6.4) であるが、仮説的推論においては、現前印象や記憶を欠いた観念から他の観念への推論が行われていると述べている (T 1.3.4.2)。ギャレットはこれらの記述から、観念が因果的な、あるいは推論上の役割を果たすこととして心的表象を特徴づけ、表象内容はその機能的役割によって決定されるとする。

機能的役割解釈の表象理論は、非心的表象をうまく説明することができる。例えば子供が親の家系を表象するとヒュームが言うのは、家系に連なる祖先たちの持つ富や名声が精神に誇りの情念を生じさせるためである。貨幣がそ

れと交換可能な美しい対象を表象するのは、実際に使用されずとも所有者に対する敬意を引き起こすためである。他のケースについても同種の説明が可能であろう。

この表象理論はまた、抽象観念の表象も説明することができる。前節で示した通り、ヒュームにとって抽象観念は個別的である。個別的な観念は、習慣によってある名辞と結び付けられることで、同一の名辞と結び付けられた他の個別的観念を呼び起こす傾向性を精神に与える。この働きによって、個別的観念は推論上の必要に応じて他の観念を精神に生じさせる。このようにして個別的観念は、抽象観念が持つとされる機能的役割を果たす。

## 2. 2 機能的役割解釈の問題点

機能的役割解釈が抱える主たる問題は、ヒュームが明示する表象とコピーの関係を適切に捉えられないことである。機能的役割とコピーの関係について、一つの可能性として主張できるのは、ヒュームは機能的役割への寄与のために表象とコピーの関係を強調したのだとすることである (Garrett 2006)。しかし、次の問題を考えるとこの応答には不満が残る。

機能的役割解釈では、印象への遡行というヒュームの論証を理解できないように思われる。再び必然的結合を例に取れば、ヒュームは観念に対応した印象が存在しないということから、必然的結合を表象する観念が存在しないことを導き出す。ランディのように意味論的コピー原理を導入すれば、この論証は理解可能なものとなる。しかし、機能的役割解釈に従えば、観念は対象のコピーであることによってではなく、機能的役割を果たすことによって対象を表象するのである。ヒュームが検討するのは必然的結合の観念を生じさせる印象であり (T 1.3.14.1)、必然的結合の観念が果たす機能的役割ではない。従って、機能的役割解釈の表象理論では、印象への遡行による論証を捉えられない。

この問題は、ギャレットのように機能的役割に寄与するものとしてコピーを捉えても解消されない。コピー関係が機能的役割の遂行の助けになるとしても、それはせいぜい経験的に一般化された主張に過ぎず、ジレンマの一方の角のため、印象への遡行が原理の侵犯を指摘すると理解することはできな

いためである。そして、印象への遡行を理解できないという問題の背景には、機能的役割解釈はヒュームの対応説的な真理論と整合しないという、より一般的な問題が伏在している (Schafer 2015)。

### 3. 統一解釈

#### 3. 1 統一理論

先の2つの節では、コピー解釈と機能的役割解釈それぞれの難点を指摘した。シェファー (Schafer 2015) はこれらの問題の主要なものを解決する理論として、コピーと機能的役割の両方によって表象を説明する「統一理論 (unified theory)」を提示する。ヒュームにおける表象は統一理論によって説明されるとするシェファーの解釈を、統一解釈と呼ぶこととする。

統一理論によれば、観念は対象の内的な特徴を表象するとともに、対象の持つ関係的な特徴を表象する。これらは先述した2つの解釈それぞれの洞察を反映しており、前者はコピー関係によって、後者は機能的役割の遂行によって説明される。ヒュームにおける表象はコピーと機能的役割の組み合わせによって初めて十分に説明され、真正の表象は内的な特徴と関係的な特徴の両方を兼ね備えるのである。

まず、統一解釈は真正な表象の条件としてコピー関係を課しており、機能的役割解釈が抱える印象への遡行論証の説明の問題をクリアできる。

さらに統一解釈は、抽象観念の表象にも十分な説明を与えることができる。個別的な観念は、習慣によってある名辞と結び付けられることで、同一の名辞と結び付けられた他の個別的観念を呼び起こす傾向性を精神に与え、抽象観念として働く。このとき、抽象観念として働く個々の個別的な観念は、まず何らかの対象のコピーであることで、対象の内的な特徴を表象している。同時に、個別的な観念は習慣と結び付くことで、推論上の必要に応じて、他の個別的な観念を呼び起こすという心的効果をもたらし、対象の関係的な特徴を表象している。

#### 3. 2 残された問題

統一解釈が取りこぼしているのは、貨幣や鍵のケースなど、コピーによる内的特徴の表象を含まない非心的表象の事例である。同様の問題は心的表象の領域にも生じ得る。例えばヒュームは十進法の観念 (T 1.1.7.12) や政府、教会、交渉、征服の観念 (T 1.1.7.13) に言及しているが、これらの観念はコピーによって内的な特徴を表象しているようには思われない。しかもヒュームは、「戦争において弱者は常に交渉に訴える」という言明は真であるが、「弱者は常に征服に訴える」という言明は偽であるとしている (T 1.1.7.13)。ここでは、内的な特徴を欠いた観念もまったく無意味なのではなく、真偽を問える命題を構成し得ると考えられている。この点で、統一理論はコピー解釈と同様に、観念が何かを表象するということに対して過度に強い条件を課してしまっている。

#### 4. 弱い統一解釈

##### 4. 1 真正の表象と虚構的な表象

統一理論はコピーによる内的特徴の表象と機能的役割の遂行による関係的特徴の表象の組み合わせという強い条件を課すため、ヒュームが有意味なものとして扱う観念の一部を排除してしまう。

本稿では、両方の条件を課す強い主張から、コピー関係を欠いていてもある種の表象たり得ることを認める穏当な主張へと統一理論を弱めることで、この問題に対応したい。統一理論は真正の表象にコピー関係と機能的役割の遂行の両方を課すが、コピー関係がなくともある意味で表象と言い得る余地を残す。

観念と表象対象の間にコピー関係が成り立たないような表象を、ヒュームはしばしば「虚構 (fiction)」と呼ぶ。このような表象の事例の一つとして、「持続の観念 (the idea of duration)」(「時間の観念 (the idea of time)」) がある。

目に見えて触れることのできる対象から空間の観念を受け取るように、私たちは観念や印象の継起から時間の観念を形成する。時間が単独で現れたり、精神によって気づかれたりすることはあり得ない。[...]これら

の現象やその他多くの現象から、時間は単独で、あるいは不動で変化しない対象を伴って精神に現れることはなく、時間は常に、変化する対象の知覚可能な継起によって知られると結論することができる。(T 1.2.3.7)

ヒュームによれば、時間の観念は知覚の継起から形成されるのであり、時間がそれだけで精神に現れることはあり得ない。従って時間の観念は、継起しない、つまり変化しない対象に由来することはなく、必ず変化する対象から生じる。しかし、時間の観念は次のように変化しない対象に適用されることがある。

持続の観念は、完全に変化不可能な対象にも適切な (proper) 意味で適用できると主張する人がいることを、私は知っている。そしてこのことは、普通人 (vulgar) と同様に哲学者にとっても一般的な意見であると考え。しかし、その誤り (falsehood) を確信するには、持続の観念は常に変化する対象に由来し、不動で変化しないものによっては精神に伝えられないという、先の結論を振り返りさえすればよい。なぜならこのことから、次のことが不可避免的に帰結するためである。すなわち、持続の観念は変化しない対象からは由来し得ないため、適当に、また正確に、変化する対象に適用することは決してできず、変化しない対象が持続すると言うことはできないのである。観念は常に、それが由来するところの対象あるいは印象を表象し、虚構なしには、他の対象あるいは印象を表象したりそれらに適用されたりすることはない<sup>6</sup>。(T 1.2.3.11)

変化する存在を欠いた時間の観念が由来するところの印象を示すことは不可能であるが、私たちがそのような観念を持っているという空想をもたらす見かけは、容易に指し示すことができる。私たちは精神において継続する知覚の継起があることを観察するため、常に時間の観念が現れており、5時に不動の対象を考え、同じ対象を6時に見ると、あらゆる瞬間が異なる位置や対象の変化によって区別される場合と同様の仕方で、

時間の観念を不動の対象に適用しようとする。対象の一度目の現れと二度目の現れが、知覚の継起と比較されることで、あたかも対象が実際に変化した場合と同様に、隔たって見えるのである。(T 1.2.3.29)

時間の観念は変化しない対象に由来し得ない、つまり対象とコピー関係に立ち得ない。しかし、知覚の継起が常に精神に現れることによって、変化する対象から生じた時間の観念は変化しない対象にも適用される。「観念は常に、それが由来するところの対象あるいは印象を表象し、虚構なしには、他の対象あるいは印象を表象したりそれらに適用されたりすることはない」と言うように、ある観念が自らとコピー関係にない対象を表象するとき、その表象は虚構と呼ばれる。コピー関係を欠いたこの表象を、真正の表象から区別し、本稿では一般に「虚構的な表象」と呼ぶこととする。

弱い統一理論に従えば、コピー関係の有無に関わらず、観念が機能的役割を遂行しさえすれば、ある意味で観念は対象を表象していることになる。一見すると、コピー関係を課さないことは、機能的役割解釈と同様に印象への遡行論証を理解不能なものにすることが懸念される。しかし、強い統一解釈と弱い統一解釈では印象への遡行が果たす役割が異なることに注目すれば、この懸念は無用であることがわかる。コピー解釈や強い統一解釈において、印象への遡行は観念による表象の成否を確かめる手段に他ならない。他方で、弱い統一解釈において印象への遡行は、コピー関係の有無によって真正な表象と虚構的な表象を区別する作業として理解される。

弱い統一理論は、種々の非心的表象や征服や交渉の観念による表象を虚構的な表象と捉える。そして、印象への遡行を通してヒュームが示しているのは、必然的結合などの観念は、リンゴの複雑観念や赤さの単純観念のように内的特徴を伴って真正な仕方では対象を表象するのではなく、虚構的に表象するということである。

#### 4. 2 表象の区別と観念の有意義性

最後に、真正の表象と虚構的な表象を区別することの眼目を論じる。この区別は対応説的な真理観が妥当する領域の特定に寄与する、というのが本稿

の见解である。

ヒュームは事実の問題に対する信念の真偽を一致・不一致と捉えている。観念と表象対象の間にコピー関係が成り立つ真正の表象のケースであれば、例えば類似性の程度として一致・不一致を理解することができるかもしれない (cf. Landy 2012, 2017)。しかし、対象を虚構的に表象する観念が真偽を問える信念であり得ることは、対応説を取る限り困難に思われる。

ヒュームは虚構的な表象のケースにおける真偽について次のように言う。以下は交渉や征服の観念とそれらに対応する名辞を含む命題の真偽について述べた箇所である。

政府、教会、交渉、征服について話すとき、私たちはめったに、複雑観念を構成するすべての単純観念を精神に広げはしないということに[...]誰もが同意すると私は信じる。それでも、この不完全さにも関わらず、私たちはこれらの主題について無意味な話をするのを避けることができ、まるで観念を完全に思い浮かべているかのように、観念の間の矛盾に気づくことができるのである。それゆえ、戦争において弱者は常に交渉に訴えると言わず、弱者は征服に訴えると言うならば、それらの関係にある関係を帰するという私たちが獲得した習慣が、やはり言葉に伴っており、私たちはその命題が不条理であることに直ちに気づくのである。(T 1.1.7.14)

ここでは、交渉や征服の観念の真偽が弱者という他の観念との関係によって規定されている。このように、対象を虚構的に表象する観念は、一致・不一致ではなく、他の知覚との因果的な、あるいは推論上の関係によって有意味であり得ると言えるだろう。

以上に示したように、一致・不一致によって有意味であるような観念と、他の知覚との関係によって有意味であるような観念があるとヒュームは想定している。弱い統一理論は、コピー関係の有無によって真正の表象と虚構的な表象を区別するが、これは対応説的な真理観を適応できる範囲の線引きである。そして、虚構的に対象を表象する観念の有意味性は、他の知覚との関

係に委ねられることになる。

## おわりに

本稿ではまずヒュームの表象理論を巡る2つの見解としてコピー解釈と機能的役割解釈を提示した。そして、一方のコピー解釈は主として非心的表象と抽象観念の表象の説明に困難を抱えており、他方の機能的役割解釈は観念の有意味性を一致・不一致に求めるヒュームの見解に合致せず、印象への遡行を理解できないという問題が指摘された。これらの問題の多くを解消する解釈として、表象にはコピー関係と機能的役割の遂行の両方が必要であるとす統一解釈を導入したが、この解釈にも対象とコピー関係を持たない観念の有意味性を認められないという問題が残った。この問題に対し、観念と対象の間にコピー関係がなくとも虚構的な表象を認めるよう、統一解釈を弱めることで対応できるというのが本稿の結論である。弱い統一解釈はコピー関係が成り立たないケースにも真正の表象と区別される虚構的な表象を認めるが、これは印象への遡行論証が理解不能であることを意味しない。印象への遡行は真性の表象と虚構的な表象を区別する営みとして理解し直すことができる。この区別を設ける意義は、一致によって有意味性を理解できる領域と、他の観念との関係の仕方によってのみ有意味性を主張できる領域の区分に対応しており、それらを区別できる点にある。

## 註

1. ここで言う図像的内容とは、概ねセンスデータのことであると考えられる。
2. ランディ自身も指摘する通り、「必然的結合のコピー」という表現には問題がある。必然的結合は明らかに図像的内容を持っておらず、印象への遡行というプロセスを待つまでもなく、必然的結合をコピーする観念が存在しないことはトリヴィアルに真であるように思われる。本節ではさしあたり、正確に類似するとは「原本の適切な内的特徴のすべてを再現している」ことであるというランディの再定義を受け入れ、原本が図像的内容を持たずともコピーが成り立ち得ることを認めて議論を進める。
3. 正確に言えばヒュームの主張は、必然的結合の観念は精神の被決定性という印象から生じているに過ぎないというものである。しかしここでは、印象への遡行に失敗

したときに得られる結論は何であるかという点を押さえることができれば十分である。

4. 観念が真または偽であるということは一見して奇妙に思われるかもしれないが、ヒュームにおいては認める余地がある。『人間本性論』において信念 (belief) は「現前する印象に関係した、つまり連合した生き生きとした観念」(T 1.3.7.5) と定義されており、またヒュームは「カエサルはベッドの上で死んだ」、「銀は鉛よりも高い可溶性を持つ」、「水銀は金よりも重い」といった命題を信念の対象とし、それらを真または偽であるものとして論じている (T 1.3.7.3)。ヒュームにおいては、信念というある種の観念が真または偽であることが認められていると考えられる。
5. 「観念の関係 (relation of ideas)」と「事実の問題 (matters of fact)」という認識対象に関するヒュームによる著名な区別は、『人間本性論』においても既に用いられている。ここでは観念の関係には触れず、事実の問題に対する信念の真偽が「一致」として理解されていることを確認するに留める。
6. ここでは変化する対象から生じた持続の観念を変化しない対象に適用することが「虚構」と呼ばれ、「誤り (falsehood)」であり「適切 (proper)」ではないことが示唆されている。ヒュームはどのような意味で虚構を誤りであるとみなしているのかという点については現在いくつかの見解が対立している。一方には、ヒュームは虚構に関する信念は偽であると主張しているのではなく、そのような信念を抱く十分な根拠がない (Traiger 1987)、あるいはそうした信念は確認不可能 (unverifiable) であり従って確認されていない (unverified) (Baier 1991, p. 103) と主張しているのだとする解釈がある。しかし他方で、トレイガーやベイヤーの解釈はヒュームの言うことを言葉通りに受け取って (take him at his word) おらず、ヒュームにおける虚構は明らかな誤りであるとみならず解釈 (Baxter 2007, p. 103) もあり、議論は一致をみていない。本稿は、虚構は斉一的に偽、あるいは無意味なのではなく、ある意味で真であり得るというトレイガーやベイヤーに類する立場を取る。

## 参考文献

- Hume, D. (1739-40) *A Treatise of Human Nature*, Norton, D. F. and Norton, M. J. Eds., (2011) Critical Edition, 2 vols., Clarendon Press. (略号として T を用い、巻、部、節、段落番号を付した。引用部の訳は筆者による)
- 木曾好能訳 (2011) 『人間本性論 第1巻 知性について (新装版)』, 法政大学出版局.
- (1740) *An Abstract of a Book lately Published, entitled A Treatise of Human Nature, & c. wherein the Chief Argument of that Book is Farther Illustrated and Explained* (略号として A を用い、再録されている前掲の *A Treatise of Human Nature* の Norton 版の段落番号を付した.)
- Baier, A. C. (1991) *A Progress of Sentiments: Reflections on Hume's Treatise*,

Harvard University Press.

- Baxter, D. (2007) *Hume's Difficulty: Time and Identity in the Treatise*, Routledge.
- Flew, A. (1961) *Hume's Philosophy of Belief*, Routledge and Kegan Paul.
- Garrett, D. (1997) *Cognition and Commitment in Hume's Philosophy*, Oxford University Press.
- (2006) “Hume’s naturalistic theory of representation,” *Synthese* 152(3), pp. 301–319.
- (2015) *Hume*, Routledge.
- Landy, D. (2012) “Hume's Theory of Mental Representation,” *Hume Studies* 38(1), pp. 23–54.
- (2017) “Recent Scholarship on Hume's Theory of Mental Representation,” *European Journal of Philosophy* 26(1), pp. 333–347.
- Schafer, K. (2015) “Hume's Unified Theory of Mental Representation,” *European Journal of Philosophy* 23(4), pp. 978–1005.
- Traiger, S. (1987) “Impressions, Ideas, and Fictions,” *Hume Studies* 13(2), pp. 381–399.